



小学校教師の学級経営力の構造：学級経営の具体的方策に関する調査研究を通して

著者	石原 努
雑誌名	筑紫女学園大学研究紀要
号	15
ページ	131-143
発行年	2020-01-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1219/00001019/

小学校教師の学級経営力の構造

— 学級経営の具体的方策に関する調査研究を通して —

石 原 努

Structure in Elementary School Teacher's Class Management Skills

Tsutomu ISHIHARA

1 研究の背景と目的

現在の日本の学校教育に関する課題は多岐にわたっている。例えば、グローバル化や情報化への対応、いじめ・不登校等への対応、特別支援教育の充実、多様な人間関係を結んでいく力の育成、高度化する諸課題への対応等が挙げられる。学校現場の教員は、このような現状や課題を踏まえながら、日々、子どもと向き合っていかなければならない。また、これらの課題の解決や改善に向けて、教師としての資質能力を高めていかなければならない。

この教員に求められる資質能力について、「教職生活に全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（審議の最終まとめ）」（文部科学省 2014）において具体的に示されている。その中の一つに、「学級経営を的確に実践できる力（以後は、学級経営力とする。）」が挙げられている。つまり、この学級経営力は、現在の日本の教育が抱えている課題を解決・改善していくためにも、教師にとって必要不可欠であるといえる。

以上のことより、本研究では、小学校教師を対象とした学級経営力に焦点を当て、研究を進めていくこととした。この学級経営についての定義は様々である。広義においては、授業場面・生活場面等、学級での教育活動にかかる業務全体を指し示す。本論における学級経営とは、主に、授業場面以外の教育活動に焦点を当てていくこととする。

学級経営力に関する内容について、『小学校学習指導要領解説総則編』（2016）では、多くの視点が示されている。例えば、「学習や生活の基盤として、教師と児童との信頼関係及び児童相互のよりよい人間関係を育てるため、日頃から学級経営の充実を図ること。」「学級は、児童にとって学習や学校生活の基盤であり、学級担任の教師の営みは重要である。学級担任の教師は、学校・学年経営を踏まえて、調和のとれた学級経営の目標を設定し、指導の方向及び内容を学級経営案として整えるなど、学級経営の全体的な構想を立てるようになる必要がある。」「学級経営を行う上で最も重要なことは学級の児童一人一人の実態を把握すること、すなわち確かな児童理解である。」「学級を一人一人の児童にとって存在感を実感できる場としてつくりあげることが大切である。」「児童相互の好ましい人間関係を育て児童の発達の支援していく上で、学級の風土を支持的な風土につくり

変えていくことが大切である。」¹⁾ 等である。また、『小学校学習指導要領解説特別活動編』(2016)においても、「学級経営の充実を図り、個々の児童について理解を深め、児童との信頼関係を基礎に指導を行うとともに、生徒指導との関連を図ること」²⁾ と示されている。このように、教師が円滑に学級経営を行っていくためには、さまざまな視点や力が必要となってくるのである。

本研究の先行研究に当たる「学級経営案（小学校版）の内容分析及び考察」（石原 2016）では、上記に記している学級経営に必要な視点や力について、学級経営案に記載している内容をもとに分類・整理し、カテゴリー化を行った。その中で、抽出された要因・要素は、以下のとおりである。

第1要因は「教育理念」で、この要素として、「豊かな心の育成」「健康教育」「その他の理念」の3点に分類・整理された。第2要因は「集団形成」で、この要素として、「目標設定」「規範意識」「支持的風土」「自治的・集団的活動」の4点に分類・整理された。第3要因は「子ども理解」で、この要素として、「信頼関係」「実態把握」「問題対応」の3点に分類・整理された。第4要因は「教室環境」で、この要素として、「環境美化」「掲示物作成」の2点に分類・整理された。

そこで、今回の研究では、この要因や要素をもとに、学級経営力に関する具体的な方策や手立て等を調査することとした。また、その結果を分析し、学級経営力の構造を明らかにするとともに、学級経営を行う際の具体的な方策や手立て等の傾向を掴むことを目的とし、研究を進めることとした。

2 方法

(1) 目的

学級経営力に関する質問紙調査を通して、学級経営に関する具体的な方策や手立ての傾向を明らかにすることを目的とする。

(2) 質問紙の作成

小学校教師の学級経営に関する具体的な方策や手立てを明らかにするための質問紙を作成した。

質問紙の構成は、Ⅰ基本情報（性別・教職歴）、Ⅱ学級経営についてとした。Ⅱの学級経営については、これまでの教員としての経験の中で、思い描いたような学級経営ができたときの手立てや学級経営に行き詰ってしまった時の状況等について、自由記述で記入することとした。また、その内容についての4段階評価（上手くいった／やや上手くいった／やや上手くいかなかった／上手くいかなかった）と、関連する要因・要素について回答を求めた。この要因・要素は、石原（2016）の先行研究で明らかになったものを採用した。質問紙の構成、及び、質問内容を表1に示す。

(3) 調査時期と手続き

2018年6月中旬から10月上旬にかけて、郵送及びメールにより調査依頼用紙を347部配付し、郵送により、質問紙を回収した。対象とした学校地域・教師は特定せず、ランダムに抽出した。質問紙の回収率は27%で、最終的に90部の回答を調査対象とした。また、90部の回答の中で、質問内容と

の整合性を踏まえ、547件の学級経営に関する方策や手立てに関する記述を分類・整理の対象とした。

表1 質問紙の構成、及び、質問内容

質問紙の構成	
I	基本情報
1	性別 ①男 ②女
2	教職歴 ①1～5年 ②6～10年 ③11～20年 ④21～30年 ⑤31年以上
II	学級経営について
	これまでの学級経営を振り返って、「思い描いたような学級経営ができた。」「○○で失敗してしまい上手くいかなかった。」という経験があると思います。また、ご自分の学級経営だけでなく、周りの先生方の学級経営についても、いろいろなお気づきがあると思います。そのような学級経営に関する先生方の率直な思いをお聞きたいと思います。具体的実践例や想起した場面について、以下の3項目について表中にご回答ください。
1	具体的実践例（方策・手立て）や想起場面の記入（自由記述） これまでの教員としての経験の中で、「思い描いたような学級経営ができたときの手立て」「学級経営に行き詰まってしまった時の状況」「他の先生のかかわり方で参考になったこと。」等について記入
2	4段階評価 1で記した内容についての4段階評価 (4上手くいった／3やや上手くいった／2やや上手くいかなかった／1上手くいかなかった)
3	1で記した内容と関連する要因や要素の選択（複数回答あり） ①教育理念：先生方が考えている教育観 等 ②豊かな心の育成：思いやり・感謝・協力・他者受容 等 ③健康教育：体力向上・食育・基本的生活習慣 等 ④集団形成：集団づくり全般 ⑤目標設定：学級目標・生活目標・その他の目標の設定・目標達成に向けた取り組み方 等 ⑥規範意識：学級のルールづくりやそれに関連する指導方針・規範意識の向上に向けた取組 等 ⑦支持的風土づくり：他のよさを認め合う場・居場所づくり・学級風土づくり 等 ⑧自治的・集団的活動：集団で活動する場・子ども主体の活動の場・係活動・班活動 等 ⑨子ども理解：子ども理解に向けた取組全般 ⑩信頼関係：子どもと向き合う基本姿勢・子どもと信頼関係を築く取組・ほめ方叱り方 等 ⑪実態把握：子どもの実態把握に向けた取組 等 ⑫問題の対応：諸問題への対応の仕方・生活指導の基本方針 等 ⑬環境美化：清掃活動・教室の環境全般 等 ⑭掲示：合言葉の作成・目標等の掲示・子どもの記録 等 ⑮その他

(4) 調査協力者の属性

調査協力者の属性（性別・教職歴）を表2に示す。

表2 調査協力者の属性

教職歴	性別		計
	男	女	
1～5年	3	10	13
6～10年	5	9	14
11～20年	21	5	26
21～30年	18	9	27
31年以上	6	4	10
	53	37	90

3 結果

(1) 評定値・要因・要素に関する結果では、数値的に処理することのできる回答（評定値、要因・要素等）の結果を示す。(2) 自由記述の分類・整理では、記述内容を分類・整理した結果を示す。

(1) 評定値・要因・要素に関する結果

① 評定値ごとの回答数

各回答の方策や手立てについての評定値（4上手くいった／3やや上手くいった／2やや上手くいかなかった／1上手くいかなかった）と、その件数を表3に示す。

表3 評定ごとの回答数

評定値	4段階評価	件数
4	上手くいったと感じる方策や手立て	255
3	やや上手くいったと感じる方策や手立て	185
2	あまり上手くいかなかったと感じる方策や手立て	46
1	上手くいかなかったと感じる方策や手立て	61
	計	547

② 評定値ごとの要因・要素の選択数

自由記述で記入した学級経営に関する具体的な方策や手立てと、関連が深いと考えられる学級経営力の要因・要素の選択数を表4に示す。ここで示す選択数は、一記述当たり、2つ以上の要因・要素が含まれるため、表3の件数とは異なっている。

表4 評定値ごとの要因・要素の回答数

評定値	①教育理念	②豊かな心の育成	③健康教育	④集団形成	⑤目標設定	⑥規範意識	⑦支持的風土づくり	⑧自治的・集団的活動	⑨子ども理解	⑩信頼関係	⑪実態把握	⑫問題の対応	⑬環境美化	⑭掲示	⑮その他	計
4	85	64	21	107	69	62	93	63	71	102	54	35	18	30	18	892
3	29	43	10	60	33	37	57	31	35	52	29	25	22	29	3	495
2	9	7	2	14	11	12	8	10	11	15	10	9	0	2	1	121
1	19	9	5	16	6	19	12	10	20	27	12	22	5	0	3	185
計	142	123	38	197	119	130	170	114	137	196	105	91	45	61	25	1693

③ 各要因・要素の関連

547件の全てにおいて、2つ以上の要因・要素を選択していた。各要因・要素の関連性をまとめた結果を表5に示す。

表の各段の上段は、選択された各要因・要素の重なり数の総数を表している。下段は、4段階の評定値をもとに、「+（プラス）群（4上手くいった・3やや上手くいった）」と「-（マイナス）群（2やや上手くいかなかった・1上手くいかなかった）」に分け、それぞれの総数を表している。

各要因・要素の関連の中で、顕著であったものは以下の通りである。

全体的にみると、「④集団形成-⑦支持的風土」が116件、「⑨子ども理解-⑩信頼関係」が108件、「⑦支持的風土-⑩信頼関係」が92件、「④集団形成-⑩信頼関係」が91件挙げられている。以上のことより、「④集団形成」「⑦支持的風土」「⑨子ども理解」「⑩信頼関係」の4要因は、学級経営の

表5 各要因・要素の関連

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
	教育理念	心の育成	豊かな健康教育	集団形成	目標設定	規範意識	支持的風土	集団的・自治的・活動	子ども理解	信頼関係	実態把握	問題の対応	環境美化	掲示	その他
①	(+ -)														
②	59	(+ -)													
③	11	12	(+ -)												
④	78	86	20	(+ -)											
⑤	52	30	11	70	(+ -)										
⑥	63	54	13	75	49	(+ -)									
⑦	76	81	10	116	50	66	(+ -)								
⑧	49	50	13	76	40	50	61	(+ -)							
⑨	39	10	45	5	12	1	67	9	35	5	39	11	54	7	
⑩	47	44	6	65	24	40	67	37	(+ -)						
⑪	38	9	37	7	5	1	56	9	19	5	31	9	56	11	30
⑫	77	57	7	91	41	63	92	44	108	(+ -)					
⑬	65	12	50	7	6	1	78	13	37	4	50	13	82	10	36
⑭	39	27	10	43	32	32	48	20	75	85	(+ -)				
⑮	33	6	23	4	8	2	38	5	28	4	26	6	41	7	15
⑯	32	23	7	40	25	36	34	20	40	58	40	(+ -)			
⑰	23	9	15	8	6	1	27	13	19	6	27	9	25	9	15
⑱	11	9	2	14	11	13	11	14	5	7	3	5	(+ -)		
⑲	7	4	8	1	2	0	13	1	10	1	10	3	10	1	12
⑳	20	16	1	32	30	15	21	15	9	14	10	6	10	(+ -)	
㉑	19	1	16	0	1	0	31	1	28	2	14	1	20	1	15
㉒	8	1	1	2	4	4	5	1	4	8	8	4	2	2	(+ -)
㉓	3	1	1	0	0	1	2	0	4	0	4	0	5	0	1
㉔	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㉕	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㉖	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㉗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㉘	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㉙	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㉚	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㉛	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㉜	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㉝	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㉞	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㉟	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㊱	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㊲	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㊳	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㊴	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㊵	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㊶	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㊷	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㊸	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㊹	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㊺	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㊻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㊼	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㊽	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㊾	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
㊿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

方策や手立てを行う際の中心として位置付けられていることがわかる。これは、プラス群の結果も同様の傾向がみられた。次に、マイナス群をみると、「⑨子ども理解-⑩信頼関係」が23件、「⑩信頼関係-⑫問題の対応」が19件、「①教育理念-⑥規範意識」が17件、「⑨子ども理解-⑪実態把握」「⑩信頼関係-⑪実態把握」が16件挙げられている。以上のことより、学級経営が上手くいかないと感じるときの要因としては、「①教育理念」「⑥規範意識」「⑨子ども理解」「⑩信頼関係」「⑪実態把握」「⑫問題の対応」の6要因が関係していることがわかる。

(2) 自由記述の分類・整理

自由記述の内容と(1)の評定値・要因・要素に関する結果をもとに、学級経営に関する具体的な方策や手立てを分類・整理した。以下に、分類・整理の手順を示す。

まず、自由記述の内容を吟味し、ラベル付けを行った。この際、選択回答された15の要因・要素以外の内容を示していると判断した記述においては、新たなキーワードを位置付け、ラベル付けを

行った。次に、ラベルをコード化し、自由記述を分類した。また、分類した記述の中で、今回の研究で定義している学級経営力との関連性が低いと考えられるものを除外した。最後に、コード化したラベルと選択された15の要因・要素の関連性を踏まえ、過程・要因・要素・視点の順で分類・整理した。表6にその結果を示す。

表6 学級経営の過程・要因・要素・視点

過程	要因	要素	視点	
計画	I 子ども理解	1 研究的姿勢	①発達段階・特別支援教育等に関する基礎的知識 ②力量を高めようとする向上心	
		2 情報収集	①引継ぎ等による情報収集 ②多面的な情報収集	
	II 経営ビジョン	1 経営全体計画の立案	①子どもの実態に応じた計画立案 ②教師の力量・考え方等に応じた計画立案	
		2 具体策の検討	①信頼関係構築に向けた具体策の検討 ②学級集団づくりに向けた具体策の検討	
	III 信頼関係形成	1 子どもとの信頼関係構築	①子どもと関わる時間や場の工夫 ②ほめる・認める／注意する・叱る際の視点や基準	
		2 教員・保護者等との信頼関係構築	①教員間の連携・協力 ②保護者・専門機関等との連携・協力	
実行	IV 集団形成	1 目標設定	①学級目標 ②TPOに応じた目標設定	
		2 学級組織	①帰属意識・自己有用感を高める工夫 ②学級のルール設定	
		3 支持的・受容的風土	①認め合う場の設定 ②豊かな心の育成に向けた取組	
		4 集団づくりのアシスト	①教室環境（掲示・環境美化） ②学級通信	
	V 教師の構え	1 子どもと向き合う基本姿勢	①受容的態度・人間性 ②子どもを見取る姿勢 ③自分の教育観と子どもの実態とのバランス	
		2 諸問題への対応	①気づく力・発見する力 ②対応力	
	評価・改善	VI 省察・修正	1 省察	①活動記録の活用 ②客観的振り返り
			2 修正	①柔軟性 ②改善策の立案

① 学級経営の3過程

学級経営は、基本的に1年間という期間の中で展開される。この1年間という時間軸をもとに、学級経営に関する方策や手立てを分類した結果、学級経営はPDCAサイクル（P計画/D実行/C評価/A改善）の繰り返しにより形成されていることが明らかになった。また、それぞれの過程において、特徴的な学級経営に関する方策や手立てを行っていることが記されていた。以上のことを

踏まえ、最終的に、学級経営の過程として「計画」「実行」「評価・改善」の3つに分類・整理し、この3過程を学級経営の基本として、学級経営力（要因・要素・視点等）の構造を明らかにしていくこととした。

② 各過程を構成する要因・要素・視点

各過程を構成する要因・要素・視点について、記述例を挙げながらその位置付けを示す。以下に挙げる記述例は、一部抜粋・省略したものである。

1) 計画過程

計画過程に関連する記述を全部で42件抽出した。その記述をもとに、「Ⅰ子ども理解」「Ⅱ経営ビジョン」の2要因、下位カテゴリーとして4要素・8視点に分類・整理した。以下に、記述例を挙げながら、その構造について述べる。

「Ⅰ子ども理解」は、「1研究的姿勢」と「2情報収集」の2つの要素に分類・整理した。「1研究的姿勢」においては、「①発達段階・特別支援教育等に関する基礎的知識」と「②力量を高めようとする向上心」の2つの視点を位置付けた。「①発達段階・特別支援教育等に関する基礎的知識」に関する記述としては、「子どもの発達段階を理解して、それに応じた学級経営の方策を考える。」「特別な配慮が必要な子どもへの関わり方について、しっかりと知識を身に付けておく必要があった。」等があった。「②力量を高めようとする向上心」に関する記述としては、「しっかりと研修をして自分の力を高めておくことによって、ゆとりをもって子どもと関わることができると思う。」等があった。「2情報収集」においては、「①引継ぎ等による情報収集」と「②多面的な情報収集」の2つの視点を位置付けた。「①引継ぎ等による情報収集」に関する記述としては、「前学年で子どもを受け持った教員から引継ぎをしっかりと行う。」等があった。「②多面的な情報収集」に関する記述としては、「子どものことだけでなく、保護者の傾向についての引継ぎも重要なことだと思う。」等があった。以上のことより、教師は、よりよく子ども理解を図るために、研究的姿勢で様々な知識を身に付けながら自らの知識を高めたり、多面的に情報を収集したりしていることがわかる。

「Ⅱ経営ビジョン」は、「1経営全体計画の立案」と「2具体策の検討」の2つ要素に分類・整理した。「1経営全体計画の立案」においては、「①子どもの実態に応じた計画立案」と「②教師の力量・考え方等に応じた計画立案」の2つの視点を位置付けた。「①子どもの実態に応じた計画立案」に関する記述としては、「子どもの実態をもとに、どのような学級にしたいのか、どのような子どもを育てたいのかといったゴールの姿を明確に描き、そのためにどんな取組を行うのかをしっかりと考えることが大切だと思う。」等があった。「②教師の力量・考え方等に応じた計画立案」に関する記述としては、「受け持つ子どもをイメージしながら、事前にある程度の学級目標を決めておく。」「先輩教師の取組を模倣して学級経営をしてみたが、上手く活用できなかった。」等があった。「2具体策の検討」においては、「①信頼関係構築に向けた具体策の立案」と「②学級集団作りに向けた具体策の立案」の2つの視点を位置付けた。「①信頼関係構築に向けた具体策の立案」に関する記述としては、「1年間の取組として交換日記を位置付け、始業式の日に日記を配布している。」等

があった。「②学級集団づくりに向けた具体策の立案」に関する記述としては、「学級経営の方針を考える際に、集団づくりの柱となる取組について考えている。」等があった。以上のことより、教師は、年度の初めの段階で、子どもの実態や自分の教育観等をもとに、個と集団のバランスを考えた学級経営の計画を立案していることがわかる。

2) 実行過程

実行過程に関連する記述を全部で497件抽出した。その記述をもとに、「Ⅲ信頼関係形成」「Ⅳ集団形成」「Ⅴ教師の構え」の3要因、下位カテゴリーとして8要素・17視点に分類・整理した。以下に、記述例や記述内容のキーワード等を挙げながら、その構造について述べる。

「Ⅲ信頼関係形成」は、「1子どもとの信頼関係構築」と「2教員・保護者等との信頼関係構築」の2つの要素に分類・整理した。「1子どもとの信頼関係構築」においては、「①子どもと関わる時間や場の工夫」と「②ほめる・認める／注意する・叱る際の視点や基準」の2つの視点を位置付けた。「①子どもと関わる時間や場の工夫」のキーワードとしては、教師も一緒に子どもと遊ぶが22件、面談・交換ノート・日記帳等を活用し交流するが22件、休み時間や放課後など時間を見つけて子どもと話す時間をつくるが14件挙げられた。「②ほめる・認める／注意する・叱る際の視点や基準」に関連しては、全部で60件挙げられた。ほめる・認めるの記述に関連するキーワードとしては、教師自身がほめる視点をしっかりとつこと・行動等の価値づけをして認める視点をもつこと・ほめるに値する行動等に気づく力をもつこと・ほめてそのよさを学級全体の場に広げること・ほめる力を向上すること等があった。注意する・叱るの記述に関連するキーワードとしては、叱る基準を明確にすること・行動等を否定しても人格を否定しないこと・感情的にならないこと・場や時間を考えて注意すること・学級経営が上手くいかないときほど叱ってしまう・叱り方を間違えてしまい信頼関係が崩れた等があった。また、ほめる・認める／注意する・叱ることのバランスについては、「叱ることよりもほめることを増やす。」「～はだめという言葉を使うことなく、その反対の行動をとっているよい行いをしている子をほめる。」「叱った後は、その日のうちにその子のよさをみつけてほめるようにする。」「事前指導を充実することで、叱ることよりもほめることを増やす。」等の記述があった。「2教員・保護者等との信頼関係の構築」においては、「①教員間の連携・協力」と「②保護者・専門機関等との連携・協力」の2つの視点を位置付けた。「①教員間の連携・協力」に関する記述としては、「学年間で同じように進めるための協力体制が必要」「隣の学級と温度差（ルール等）がありすぎると効果的に学級づくりを進めることができない。」等があった。「②保護者・専門機関等との連携・協力」に関する記述としては、「子どもを認めれば、その保護者も喜ぶと思う。その連動が大切だ。」「あることをきっかけに、保護者の不信を招き、その時から学級が上手くいかないようになった。」「発達障害がある子どもへの対応の仕方等で悩んでいるときに、専門機関に相談しアドバイスをもらった。」等があった。以上のことより、教師は、子どもの実態や自分の考え等に応じながら、子どもと関わる時間や場を工夫したり、ほめ方叱り方等を考えながら子どもと接したりして、信頼関係を築き上げようとしていることがわかる。また、直接子どもと関わるものではないが、学級経営をよりよく行っていく際に、教員間や保護者等との連携・協力は欠かすことができない視点であることがわかる。

「IV 集団形成」は、「1 目標設定」「2 学級組織」「3 支持的・受容的風土」「4 集団づくりのアシスト」の4つの要素に分類・整理した。「1 目標設定」は、「①学級目標」と「② TPO に応じた目標設定」の2つの視点を位置付けた。「①学級目標」に関連する記述としては、「学級が目指す方向性を学級目標として学級全体で共通することで集団づくりにつなげている。」「学級目標やスローガンを設定することで（掲示し）仲間意識や集団意識が高まった。」等があった。「② TPO に応じた目標設定」に関する記述としては、「学期ごとにそれぞれのめあて（学習・生活）を立てさせ月ごとに振り返りを行った。また、めあての達成を意識するように声かけをした。」「学級の全員で一つのことに取り組むなど、目標を共有した。」「仲間作りが上手な先生の学級は子ども同士の関係がよく、自治的な学級になっていると思う。」等があった。「2 学級組織」は、「①帰属意識・自己有用感を高める工夫」と「②学級のルール設定」の2つの視点を位置付けた。「①帰属意識・自己有用感を高める工夫」に関する記述としては、「児童が創意工夫できるような係活動の場を設定することで、自分たちで創り出す雰囲気できた。」「様々な活動での役割を、班単位で輪番制にすることで、役割意識が生まれよりよい集団づくりにつながった。」「係活動において、一人一役を割り当てる。」等があった。キーワードとしては、係活動・奉仕活動・清掃当番・給食当番・下級生のお世話・イベントの役割・行事での役割・ボランティア活動を通して人の役に立っている感覚を持たせる等28件挙げられた。また、この取組を通して、一人一人の居場所づくりにつながっているといった記述もあった。「②学級のルール設定」の記述としては、「給食中のもぐもぐタイム（黙って食べる）クリーンタイム（片付け・清掃）等学級でのルールを決める。」「学級のルールを確認し、できたことをスマールステップで認め、励ましたことで、落ち着いた生活ができるようになった。」「学年のはじめに生活における学級のルールを子どもと共につくり、それを徹底することで子どもたちが安心してすごすことができる環境をつくることができた。」「守るべききまりやルールが曖昧な部分が多かった。教師の言動に一貫性がない。」等があった。その他のキーワードとしては、規範意識・けじめ・あいさつ・清掃活動等があった。「3 支持的・受容的風土」は、「①認め合う場の設定」と「②豊かな心の育成に向けた取組」の2つの視点を位置付けた。「①認め合う場の設定」に関する記述として、「帰りの会で、今日の NICE 君・NICE さんを発表しあう場面を設け、お互いを認め合う活動を毎日行った。」「帰りの会に、ほめほめタイムを設け、ペアでお互いの今日良かったところをほめるようにした。」等があった。「②豊かな心の育成に向けた取組」に関する記述として、「道徳の学習で学んだことと日常生活をつなげて合言葉にして掲示する。」「自分のよさや頑張りを日記に書かせ、それに肯定的なコメントを書いている。」「チクチク言葉・フワフワ言葉をみんなで出し合いながら、日々のよりよい言葉遣いを心がけるようにしている。」等があった。「4 集団づくりのアシスト」は、「①教室環境（掲示・環境美化）」と「②学級通信」の2つの視点を位置付けた。「①教室環境（掲示・環境美化）」に関する記述として、「教室環境を整える（整理整頓・物を大切に・言葉遣い）ことを通して落ち着いた生活ができるようになった。」「掃除だいすきの合言葉で、みんなでみんなの教室をきれいにしようという意識が高まった。」「目的に応じた掲示を心掛け、視覚的に子どもたちが学びや暮らしについて意識することが出来るようにしている。」等があった。「②学級通信」に関する記述として、「学級通信を通して子どもたちの頑張りを発信した。」「年間を通して、学級通信

に、子どもの良さを記すことで、子ども及び保護者からの信頼を得ることに繋がった。」等があった。以上のことより、教師は、目標を設定し学級が進むべき方向性を明確にし、学級の組織づくりを工夫したり、学級のまとまりを意識した取組をしたりしながら、まとまりのある学級集団をつくらうとしていることがわかる。

「V教師の構え」は、「1子どもと向き合う基本姿勢」と「2諸問題への対応」の2つの要素に分類・整理した。「1子どもと向き合う基本姿勢」は、「①受容的態度・人間性」「②子どもを見取る姿勢」「③自分の教育観と子どもの実態とのバランス」の3つの視点を位置付けた。「①受容的態度・人間性」に関する記述としては、「とにかく子どもの気持ちをしっかりと聞くように心がけている。」「何かあったときに、頭ごなしに教師の意見を言うのではなく、まずは、しっかりと子どもの言い分を聞くようにしている。」「朝から元気に「おはよう」のあいさつをして子どもを迎える。そして、帰りは、「明日も待ってるね」といって気持ちよくさようならをする。この基本的なことをしっかりと行うようにしている。」「先生が、子どもと一緒に目線で、子どもと一緒に笑っている学級はいいと思った。」等があった。「②子どもを見取る姿勢」に関する記述としては、「よく子どもをほめている先生は、本当に子どもを観察している。また、気づく視点も多いと感じた。」「ちょっとした子どもの変化に気づくことが大切だと思う。その変化に気づくことができれば、大きな問題になる前に解決につなげていくことができる。」「子どもの成長や変化に気づくことができるように、こまめに記録をつけていった。それをもとに、子どもをほめることもできた。」等があった。「③自分の教育観と子どもの実態とのバランス」に関する記述としては、「教師の思いばかり話をしている先生、そして、先生の話が長くてくどい先生の学級は、子どもとの関係性が上手くいっていないように思う。」「とにかく子どもには厳しく接する。そうすることで、子どもは、そうになっていく。」「先生の顔色を見て子どもが動いている学級は、見た目は学級の荒れは見えないが、これでいいのだろうかと思う。」等があった。「2諸問題への対応」は、「①気づく力・発見する力」と「②対応力」の2つの視点を位置付けた。「①気づく力・発見する力」に関する記述としては、「どんな学級であっても、問題は必ず起こると考えて学級経営に臨む。」「問題が起こる前兆があるので、それに早めに気づくことが、早期解決につながると思う。」等があった。「②対応力」に関する記述としては、「子どもの日頃の行いが悪いということで、一方的に子どもを責めてしまったことがあった。この判断が間違っており、信頼関係を崩してしまった。この件以来、常日頃から子どもをよく観察し、決して決めつけたことを言わないように心がけるようになった。」「ちょっとした怪我だと思っていて保護者へ連絡をしなかったことがある。この後、保護者からの事後対応の悪さを指摘され、不信感につながった。」「グループ間のいざこざがあったとき、教師の立ち位置次第で、どんどん子どもとの関係が悪くなる恐れがある。」等があった。以上のことより、教師は、子どもと向き合う際の自分なりの基本姿勢や学級経営をよりよく展開するための技術をもっており、それを活かしながら学級経営を展開していることがわかる。

3) 評価・改善過程

評価・改善過程に関連する記述を全部で28件抽出した。その記述をもとに、「VI省察・修正」の1要因、下位カテゴリーとして2要素・4視点に分類・整理した。以下に、記述例を挙げながら、

その構造について述べる。

「Ⅵ省察・修正」は、「1省察」と「2修正」の2つ要素に分類・整理した。「1省察」においては、「①活動記録の活用」と「②客観的振り返り」の2つの視点を位置付けた。「①活動記録の活用」に関する記述としては、「子どもの記録を適宜とるように心がけている。(中略)何がよくて、何がよくなかったのかわかるだけでなく、新たな学級経営の方策や目標を立てるときに役立てることができた。」等があった。「②客観的振り返り」に関する記述としては、「昔、自分の思いばかりが強くなりすぎて、学級経営が空回りしてしまったことがある。その当時は、自分の取組を全く振り返ることができていなかったと感じている。」「前年度の自分の学級経営を振り返り、その課題解決に向けた取組を考える。」等があった。「2修正」においては、「①柔軟性」と「②改善策の立案」の2つの視点を位置付けた。「①柔軟性」に関する記述としては、「そのときの状況に応じて柔軟に手立てを変えること。」等があった。「②改善策の立案」に関する記述としては、「学級経営がうまくいっていないと感じたときは、早めに何らかの方策を考えないと間に合わない。(学級崩壊につながるということ)」等があった。以上のことより、教師は、自分自身の学級経営について、記録等を通して客観的に振り返りながら活動を修正したり、新たな方策等を考えたりしていることがわかる。

4 考察

以下に、本研究を通して明らかになった学級経営の構造やそれに関する学級経営力等について考察する。

(1) 学級経営の全体構造

学級経営は、「計画→実行→省察・修正」という過程の繰り返しにより構成されている。

計画過程では、研究的姿勢をもって子どもに関する知識を身に付けたり、情報を多面的に収集し子どもの実態を把握したりしながら子ども理解に努めていくこととなる。その上で、子どもの実態と教師がもっている教育観等をよりよく融合させながら、1年間の学級経営のビジョンを描いていくこととなる。

実行過程では、「信頼関係形成」「集団形成」の2つの要因に関する様々な方策や手立てを講じながら、学級経営を展開していくこととなる。子どもと関わる時間を工夫して設けたり、子どもをほめたり、認めたりしながら、子どもとの信頼関係を構築していく。また、それと並行して、集団づくりに向けた取組を展開していくこととなる。その取組において、集団の中で個を活かしたり、個のよさを集団に広げたりしながら、よりよい学級集団を構築していくこととなる。子どもとの信頼関係を構築することができれば、教師が行う学級経営に関する方策や手立てが効果的に展開されると考えられる。問題への対応についても同様である。子どもとの信頼関係構築に重点を置き、開発的指導を行っていくことで、様々な問題を未然に防止したり、問題の早期解決につなげたりすることができるであろう。以上のように、この2要因は、双方向に深く関連しており、教師は、信頼関係づくりと集団づくりのバランスを考えながら学級経営を展開していく必要があると考えられる。

また、これらの取組を支えるものとして、「教師の構え（子どもと向き合う基本姿勢や諸問題への対応力）」が必要になる。「信頼関係形成」「集団形成」に関する様々な方策や取組を効果的に行うためにも、また諸問題をよりよく解決していくためにも、この要因が重要になると考えられる。

評価・改善過程では、活動の記録を活用する等して、子どもの変容や学級経営に関する取組を省察し、その内容に応じて、活動を修正したり、新たな方策を考えたりしていくこととなる。この過程において、教師が学級経営に関する取組を客観的に省察する視点等を身に付けておくことで、次のサイクルへつなげていくことができる。学級経営における取組を客観的に振り返る自己評価力を高めていくことにより、効果的な改善策を立案することができるといえる。以上のサイクルを繰り返すことにより学級経営が展開されている。

全過程を通して、教師の子どもに対する関わりには、直接的なものと同接的なものがあった。間接的な方策・手立ての一つとして挙げられることが、教員・保護者等との連携・協力である。直接子どもとの関わりはないものの、この視点も、教師に求められる学級経営力の一つとして捉える必要があるといえる。

（2）教師の教育観と学級経営に関する方策や手立て

当然のことながら、教師には、それぞれの教育観・人間性があり、それを反映した学級経営を構想し、実践していくこととなる。この教育観・人間性が異なれば、描く学級経営像もそれぞれであり、それに伴って、方策や手立て・子どもとの関わり方等が変わってくる。同様に、子どもの実態や年齢が変われば、方策や手立ても変化してくる。つまり、教師自身も持っている教育観・人間性と子どもの実態とのよりよいバランスをとりながら学級経営を行っていかなければならないということである。このバランスについて、「子ども中心－教師中心」「一貫性－柔軟性」「連携・協力－学級独自」の3観点から考察する。

「子ども中心－教師中心」の観点に関連して、「教師の顔色をうかがいながら子どもが動いている学級」（評定値1上手くっていない）という記述があった。この場面で、該当学級の教師においては、自分が思い描いたように子どもが動いているからよい学級だと感じている可能性もある。同じ様相であっても、教師の捉え方により、その評価が全く違ったものになるのである。他にも、「とにかく子どもの話をしっかりと聞いて、子どもの意見に耳を傾けるようにする。」（評定値4上手くいった）と「とにかく子どもには厳しく接する。」（評定値4上手くいった）という記述があった。この2つの記述は対照的なものであるが、どちらも学級経営が上手くいっていると感じている。子どもとの信頼関係構築に重きを置くのか、自分の学級経営の方針に重きを置くのかという部分で、教師の手段が異なるということであろう。「一貫性－柔軟性」の観点に関連して、「学級のルールをしっかりと決めて一貫性のある指導をすることが大切」（評定値4上手くいった）と「一貫性のある指導が大切だと思い注意ばかりしていたら、子どもとの関係性が悪くなった。」（評定値1上手くっていない）という記述があった。これは、一貫性のある指導を行う際の教師の構えや子どもとの信頼関係、子どもの実態とのズレ、といったことと関連していると考えられる。「連携・協力－学級独自」の観点に関連して、「隣接学級の先生と連携をしっかりと取って共同歩調することで子

どもが落ち着く」(評定値4上手くいった)と「イベントや文化祭等に関する取組を通して、学級のカラーをつくる」(評定値4上手くいった)という記述があった。連携・協力を重きを置くのか、それとも学級独自の取組に重きを置くのかということである。

以上のことを踏まえると、教師は、時と場合と目的に応じて、「子ども中心-教師中心」「一貫性-柔軟性」「連携・協力-学級独自」のバランスを考えながら、学級経営を展開していかなければならないのである。また、教師自身の自己理解を深め、自分がどのようなタイプなのかを意識しながら学級経営を展開することで、効果的に学級経営を展開していくことができると考えられる。

5 課題

今回の研究における調査対象者は90名であった。対象外の教師が、今回、抽出した要因・要素・視点以外の学級経営に関する多様な取組を行っていると考えられる。このことを踏まえると、今回抽出した内容は、学級経営力の一部であることになる。ただ、抽出件数が多かった2要因(信頼関係形成・集団形成)については、学級経営力の中核をなすものであると考えられる。今後の研究において、この2要因の構造をより具体的に分析していくことで、学級経営力の構造等をより明確にしていくことができると考える。

また、今回の研究において、教師自身も持っている教育観と子どもの実態とのよりよいバランスをとって学級経営を行っていく必要があるということは明らかになったが、そのバランスのとり方等については明らかにすることができていない。今後の課題の一つである。

引用文献

- 1) 文部科学省(2017)『小学校学習指導要領解説総則編』東洋館出版 pp96-97
- 2) 文部科学省(2017)『小学校学習指導要領解説特別活動編』東洋館出版 p50

参考文献

- 石原努(2018)「学級経営案(小学校版)の内容分析及び考察」『筑紫女学園大学研究紀要』第13号 pp151-163
- 石川美智子(2016)「学級経営の動向 -学級の変遷・戦後の学級経営論文と小学校教師への調査-」『佛教大学教育学部論集』第27号 pp15-32
- 国立教育政策所(2000)「学級経営をめぐる問題の現状とその対応」『国立教育研究所広報』第124号
- 文部科学省(2014)「教職生活に全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(審議の最終まとめ)」
- 森田純 山田雅彦(2013)「学級経営に影響を及ぼす教師 -児童関係に関する質問紙調査-」『東京学芸大学教育学研究年報』第32号 pp23-37
- 岡村美由規(2018)「教師教育における専門性と能力に関わる諸概念の整理と検討」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部 第67号 pp47-55

(いしはら つとむ 人間科学科 教授)

